

＜書 評＞

岩倉博光（帝京大学教授リハビリテーション科）他 編

運動器疾患とリハビリテーション

大川弥生（東大病院リハビリテーション部）

本書は「運動器疾患の概説を医学的リハビリテーションと関連させてまとめよう」という試みのもとに編纂されたものである。全体の構成としては1)総論、2)全身に症状を呈する疾患、3)上肢、4)体幹、5)下肢、6)切断の全6章から成り、各論、特に各疾患論重視となっている。その内容配分をみると、リハビリテーション医学上の重要度にはとらわれずに比較的均等になされているようである。即ち基礎的事項（解剖、生理、各種評価法等）や主要対象疾患（脊損、RA等）はこれまでに他のリハビリテーション関係書物に詳しく述べられているものであり、これらについての記述は必要最少限になされているようである。

そのために、これまでにはない、医学的リハビリテーションについて詳述された運動器疾患の著作になったと思われる。

各論においては数名の著者が各々の専門分野についての分担執筆となっている。そのため各疾患ともに内容的にしっかりしており、各疾患論重視のこの著書では重要なことと思われる。しかし逆に分担執筆の場合に起り易い弱点でもあろうが、各項目毎の構成が一致しているとはいえないようである。即ち各項目は大体において概念・診断・治療・リハビリテーションプログラムという構成になっているようであるが、各々の重みづけが一致していず、特に本書において最も基本となると思われるわ

“リハビリテーションとの関連づけ”の仕方・見解が各著者によりかなり異なるようである。この点に関連して筆者の希望をあげさせていただければ、リハビリテーションとの関連づけを、病態や予後との関係でより詳しく述べていただきたかったと思う。

しかし本来本書は主たる対象をPT・OTの学生においてまとめられているため、学生の整形外科のテキスト的役割もかなり期待されていると推測される。その目的からいえば、非常に興味・関心をひく良いテキストとなろう。そしてまた現在既にリハビリテーション医療の現場にいる人達にとっても、リハビリテーション主要対象疾患以外の各種運動器疾患をまとめた、これまでにないマニュアル的な書物として適切なものと思われる。

（B5，頁308，1984，¥5,800
医歯薬出版 刊）